

2025年1月25日 実施

東北医科薬科大学

医学部 一般 物理

(制限時間 理科2科120分)

解答速報

医学部専門予備校



解 答

第1問

- | | | | | | | | | | |
|----|---|----|---|---|---|---|---|----|---|
| 1 | ⑥ | 2 | ④ | 3 | ③ | 4 | ⑦ | 5 | ⑧ |
| 6 | ② | 7 | ② | 8 | ⑧ | 9 | ③ | 10 | ④ |
| 11 | ⑥ | 12 | ① | | | | | | |

第2問

- | | | | | | | | | | |
|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|
| 13 | ③ | 14 | ④ | 15 | ③ | 16 | ③ | 17 | ② |
| 18 | ④ | 19 | ① | 20 | ① | 21 | ⑨ | 22 | ④ |
| 23 | ③ | 24 | ⑤ | | | | | | |

第3問

- | | | | | | | | | | |
|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|
| 25 | ③ | 26 | ⑤ | 27 | ③ | 28 | ⑤ | 29 | ③ |
| 30 | ⑤ | 31 | ③ | 32 | ③ | 33 | ④ | 34 | ④ |
| 35 | ⑥ | 36 | ⑤ | | | | | | |

解 説

第1問

問1(1) 求める速さを v_R として、力学的エネルギー保存の法則より、

$$\frac{1}{2}mv_R^2 = mg \cdot \frac{r}{2} \quad \therefore v_R = \frac{\sqrt{gr}}{\boxed{1}:⑥}$$

(2) 小球が点Rから最高点に達するまでの時間を t_1 とすれば、鉛直方向の等加速度運動から、

$$t_1 = \frac{\frac{\sqrt{3}}{2}\sqrt{gr}}{g} = \frac{1}{2}\sqrt{\frac{3r}{g}} \quad \boxed{2}:④$$

点Rから最高点までの鉛直方向の変位 h は、鉛直方向の等加速度運動から、

$$h = \frac{1}{2} \frac{\sqrt{3}}{2} \sqrt{gr} \cdot t_1 = \frac{3}{8}r$$

ゆえに最高点の y 座標は、

$$y = \frac{3}{2}r + h = \frac{15}{8}r \quad \boxed{3}:③$$

最高点から床に落下するまでの時間を t_2 とすれば、鉛直方向の等加速度運動から、

$$y = \frac{1}{2}gt_2^2 \quad \therefore t_2 = \sqrt{\frac{2h}{g}} = \frac{1}{2}\sqrt{\frac{15r}{g}} \quad \boxed{4}:⑦$$

ゆえに、床に落下した点の x 座標は

$$x = \frac{\sqrt{3}}{2}r + \frac{1}{2}\sqrt{gr}(t_1 + t_2) = \frac{3\sqrt{3} + \sqrt{15}}{4}r \quad \boxed{5}:⑧$$

問2(1) 衝突直前の小球Aの速さ v_0 は力学的エネルギー保存則より $v_0 = \sqrt{2gr}$ である。

衝突直後の小球Aと小球Bの右向きを正とした速度をそれぞれ v 、 V とすれば、

$$\text{運動量保存則: } mv + MV = mv_0$$

$$\text{はね返り係数の式: } v - V = -ev_0$$

連立して、

$$v = \frac{m - eM}{M + m}v_0 = \frac{m - eM}{M + m}\sqrt{2gr}$$

$$V = \frac{(1 + e)m}{M + m}v_0 = \frac{(1 + e)m}{M + m}\sqrt{2gr} \quad \boxed{6}:⑨$$

(2) 小球Aが衝突してからはじめて点Sに戻る時間 t_3 は単振り子の周期 $T = 2\pi\sqrt{\frac{r}{g}}$

を用いて,

$$t_3 = \frac{T}{2} = \pi\sqrt{\frac{r}{g}}$$

単振り子の振幅は $r\phi$ であり, 角振動数 ω は $\omega = \sqrt{\frac{g}{r}}$ であるから, 最大速度 $|v|$ との対応関係より,

$$|v| = r\phi\omega \quad \therefore \phi = \frac{|v|}{r\omega} = \frac{|m - eM|}{M + m} \frac{\sqrt{2gr}}{r\sqrt{\frac{g}{r}}} = \frac{\sqrt{2} |m - Me|}{m + M}$$

問3(1) 小球が最定点Sを通過するときの小球と台の中心(最下点S)の x 座標をそれぞれ x_1, X_1 とすると, 重心の x 座標がはじめと同じ $-\frac{m}{M' + m}r$ であり続けることと, 最下点に達したことから,

$$\text{重心静止: } \frac{mx_1 + M'X_1}{M' + m} = -\frac{m}{M' + m}r$$

$$\text{最下点に達した: } x_1 = X_1$$

以上より,

$$x_1 = X_1 = -\frac{m}{M' + m}r$$

最下点を通過した瞬間の小球と台の速度の x 成分をそれぞれ v, V' とおくと,

$$\text{運動量保存則: } mv + M'V' = 0$$

$$\text{エネルギー保存則: } \frac{1}{2}mv^2 + \frac{1}{2}M'V'^2 = mgr$$

以上より,

$$v = \sqrt{\frac{2M'gr}{M' + m}}, \quad V' = -\frac{m}{M'}\sqrt{\frac{2M'gr}{M' + m}}$$

(2) 小球が点Rを飛び出すときの小球と台の中心の x 座標をそれぞれ x_2, X_2 とすると, 重心の x 座標がはじめと同じ $-\frac{m}{M' + m}r$ であり続けることと, 点Rに達したことから,

$$\text{重心静止: } \frac{mx_2 + M'X_2}{M' + m} = -\frac{m}{M' + m}r$$

$$\text{点 R に達した : } x_2 = X_2 + \frac{\sqrt{3}}{2}r$$

以上より,

$$x_2 = \frac{\sqrt{3}M' - 2m}{2(M' + m)}r$$

[11]:⑥

小球が点 R を飛び出すときの台車とともに動く観測者から見た小球の速さを u とすると, その x 成分は $\frac{1}{2}u$ である。台車の速さを V'_R とすれば, 床から見た小球の速度

の x 成分は $\frac{1}{2}u - V'_R$ と表せる。運動量保存則より,

$$m\left(\frac{1}{2}u - V'_R\right) - M'V'_R = 0 \quad \therefore V'_R = \frac{m}{2(M' + m)}u$$

[12]:①

第2問

問1 (1) 十分に長い時間が経過するとコンデンサーの充電が完了し、電流はすべて抵抗を流れる。よって、抵抗の両端に生じる電圧 V は、

$$V = \frac{RI}{\boxed{13}:③}$$

(2) コンデンサーのエネルギーは変化しないため、電源の供給電力 P はすべて抵抗で消費される。したがって、

$$P = \frac{RI^2}{\boxed{14}:④}$$

コンデンサーの極板間電圧は $V = RI$ となっているため、蓄えられている電荷 Q は、

$$Q = \frac{CRI}{\boxed{15}:③}$$

(3) コンデンサーの電気容量が瞬時に $2C$ になることで、コンデンサーの極板間電圧が $\frac{V}{2} = \frac{RI}{2}$ に下がる。抵抗の両端の電圧も $\frac{RI}{2}$ となるため、抵抗を流れる電流は $\frac{I}{2}$ となる。電流の保存より、コンデンサーには電流 $\frac{I}{2}$ が流れることになる。したがって、誘電体の挿入直後における電源の供給電力 P' は、

$$P' = R\left(\frac{I}{2}\right)^2 + \frac{RI}{2} \cdot \frac{I}{2} = \frac{RI^2}{2}$$

となり、誘電体挿入の直前から減少する。その後十分に長い時間が経過するとコンデンサーの充電が完了し、電流 I が抵抗を流れるようになるため、このときの電源の供給電力は RI^2 であり、誘電体挿入の直前と比べて変わっていない。

$\boxed{17}:②$

問2 (1) 十分に長い時間が経過するとコイルを流れる電流は一定となり、コンデンサーの電荷の変動もなくなる。コイルの誘導起電力は0となるため、コンデンサーの極板間電圧も0である。したがって、コンデンサーに蓄えられている電気量 Q は $Q = 0$ である。コイルには一定の電流 I が流れているため、コイルに蓄えられて

$\boxed{19}:①$

いるエネルギー E は、 $E = \frac{1}{2}LI^2$ である。

$\boxed{18}:④$

(2) スイッチ S を開いた直後に、コンデンサーの極板間電圧は0であるため、コイルの両端に生じる電圧 V も $V = 0$ である。

$\boxed{20}:①$

(3) その後、コイルとコンデンサーからなる回路には電気振動が生じる。コンデンサーの電気量、極板間電圧が最大となるとき、コイルを流れる電流は0となるため、エネルギー保存則より、

$$\frac{1}{2}LI^2 = \frac{Q_{\max}^2}{2C} = \frac{1}{2}CV_{\max}^2 \quad \therefore Q_{\max} = \frac{I\sqrt{CL}}{\boxed{21}:\text{㊸}}, \quad V_{\max} = \frac{I\sqrt{\frac{L}{C}}}{\boxed{22}:\text{㊸}}$$

- (3) 電気容量 C のコンデンサーと自己インダクタンス L のコイルからなる回路における電気振動の周期は $2\pi\sqrt{LC}$ で表される。(2)の操作の後にコイルを流れる電流が初めてゼロになるまでの時間は電気振動の周期の $\frac{1}{4}$, すなわち $\frac{\pi}{2}\sqrt{LC}$ である。この値は電流の初期値には 依存せず, 電気容量を2倍にすると $\sqrt{2}$ 倍になる。
 $\boxed{23}:\text{㊸}$ $\boxed{24}:\text{㊸}$

第3問

問1 状態Aにおいてピストンにはたらく鉛直方向の力のつり合いより、

$$p_A S = p_0 S + mg \quad \therefore \quad p_A = p_0 + \frac{mg}{S}$$

[25]:③

状態Aの状態方程式より、

$$p_A Sh = nRT_A \quad \therefore \quad T_A = \frac{p_A Sh}{nR}$$

[26]:⑤

問2 状態Aと状態Bについて、シャルルの法則より、 $T_B = \frac{2Sh}{Sh} T_A = 2T_A$ であるから、

定圧過程A→Bにおける内部エネルギーの増加 ΔU_{AB} は、

$$\Delta U_{AB} = \frac{3}{2} nR(T_B - T_A) = \frac{3}{2} nRT_A$$

[27]:③

定圧過程A→Bにおいて気体が外部にした仕事 W_{AB} は、

$$W_{AB} = p_A(2Sh - Sh) = p_A Sh = nRT_A$$

であるから、熱力学第一法則より、気体が吸収した熱量 Q_{AB} は、

$$Q_{AB} = \Delta U_{AB} + W_{AB} = \frac{5}{2} nRT_A$$

[28]:⑤

問3 状態Cにおいてピストンにはたらく鉛直方向の力のつり合いより、

$$p_C S = p_0 S + (m + M)g$$

断熱過程B→Cに、与えられたポアソンの式を適用して、

$$p_C (Sh)^\gamma = p_B (2Sh)^\gamma \quad \therefore \quad p_C = 2^\gamma p_B = 2^\gamma p_A = 2^\gamma \left(p_0 + \frac{mg}{S} \right)$$

これら2式より、

$$M = (2^\gamma - 1) \left(\frac{p_0 S}{g} + m \right)$$

[29]:⑥

断熱変化において、温度 T と体積 V の間には $TV^{\gamma-1} = (\text{一定})$ の関係が成立するから、

$$T_C (Sh)^{\gamma-1} = T_B (2Sh)^{\gamma-1} \quad \therefore \quad T_C = 2^{\gamma-1} T_B = 2^{\gamma-1} \cdot 2T_A = \frac{2^\gamma T_A}{2}$$

[30]:⑥

断熱過程B→Cにおいて気体が外部からされた仕事 $|W_{BC}|$ は内部エネルギーの増加 ΔU_{BC} に等しく、

$$|W_{BC}| = \Delta U_{BC} = \frac{3}{2} nR(T_C - T_B) = \frac{3}{2} nR(2^\gamma T_A - 2T_A) = \frac{3(2^\gamma - 1)nRT_A}{2}$$

[31]:⑥

問4 状態Dにおけるピストンの高さを h_D とする。断熱過程B→C、D→Aに、ポアソンの式を適用して、

$$p_C(Sh)^\gamma = p_B(2Sh)^\gamma, \quad p_D(Sh_D)^\gamma = p_A(Sh)^\gamma$$

辺々割って、 $p_B = p_A$ 、 $p_D = p_C$ を考慮すると、

$$\frac{p_D(Sh_D)^\gamma}{p_C(Sh)^\gamma} = \frac{p_A(Sh)^\gamma}{p_B(2Sh)^\gamma} \quad \therefore h_D = \frac{h}{\sqrt[\gamma]{2}} \quad \boxed{32}:\textcircled{9}$$

状態Cと状態Dについて、シャルルの法則より、

$$T_D = \frac{S \frac{h}{\sqrt[\gamma]{2}}}{Sh} T_C = \frac{T_C}{2} = \frac{2^\gamma}{2} T_A = \frac{2^{\gamma-1} T_A}{\sqrt[\gamma]{2}} \quad \boxed{33}:\textcircled{4}$$

定圧過程C→Dにおける内部エネルギーの減少量 $|\Delta U_{CD}|$ は、

$$|\Delta U_{CD}| = \frac{3}{2} nR(T_C - T_D) = \frac{3}{2} nR(2^\gamma T_A - 2^{\gamma-1} T_A) = \frac{3}{2} 2^{\gamma-1} nRT_A \quad \boxed{34}:\textcircled{4}$$

定圧過程C→Dにおいて気体が外部からされた仕事 $|W_{CD}|$ は、

$$|W_{CD}| = p_C \left(Sh - S \frac{h}{2} \right) = \frac{1}{2} p_C Sh = \frac{1}{2} nRT_C = 2^{\gamma-1} nRT_A$$

であるから、熱力学第一法則より、気体が放出した熱量 $|Q_{CD}|$ は、

$$|Q_{CD}| = |\Delta U_{AB}| + |W_{AB}| = \frac{5}{2} 2^{\gamma-1} nRT_A \quad \boxed{35}:\textcircled{6}$$

問5 求める仕事はサイクル全体で気体が外部にした正味の仕事 W である。 W は、サイクル全体の吸熱量と放熱量の差で求められ、

$$W = Q_{AB} - |Q_{CD}| = \frac{5}{2} nRT_A - \frac{5}{2} 2^{\gamma-1} nRT_A = -\frac{5}{2} (2^{\gamma-1} - 1) nRT_A \quad \boxed{36}:\textcircled{5}$$